

晩晴舎記 : 舊稿 : 文苑

著者	笠間, 梧園
雑誌名	龍南會雜誌
巻	33
ページ	33-34
発行年	1895-01-30
その他の言語のタイトル	晩晴舎記 : 旧稿 : 文苑
URL	http://hdl.handle.net/2298/4514

文苑

晚晴舍記

舊稿

教授 笠間 梧園

昔者東坡在黃州。寓居臨臯。築堂而成。適雪大至。因名曰雪堂。吾草堂始成也。時屬春夏之交。霖雨向夕。歇山淨水。鵲野色瀟灑。嵐翠可掬。乃名曰晴晴舍。亦欲不諛其成之日耳。一日有客過余。曰。善哉子之命名也。試言之。夫人之處世也。進退出處之際。利害得喪。磨其身者。變化無窮。洵如可駭可喜者。然自達人觀之。則猶天地有陰陽晴雨異也。當夫烈風暴雨。方至之時。天地晦冥。日星藏光。飛鳥護樹。怪獸晝出。及其風收雨歇。則雲霧四散。碧空如拭。而夕陽在山。雖有晦明之異。如此者。未足以動其心也。人事之得喪。蓋亦不過如此耳。世或有不達觀於此者。事物一變於前。則所守輒易於中。喜則沈酣於富貴。怒則陷於反側。史乘之所載。歷々可以徵也。是謂之不善處於世者矣。吾觀子之出處進退。十餘年間。一入大學而罷。二用於兵部。而見斥。未曾一有所伸焉。今也則沈淪落魄。爲教授於陋鄉千里之外。不可謂得其志者。而日坐校舍。訓誘後進。講經史。論文章。循々不倦。暇日則抱膝於一室。而右酒盃。左韻府。或提携學友數輩。幅巾藜杖。而逍遙於山巔水涯。以極耳目之所娛。欣然如將終身焉。不知者。或謂子旣隱矣。無復意於世也。而以吾觀之。子之今日。則天地晦冥。風雨未歇之時也。故且安於其所處。以待晚晴之日耳。當其得志則錦衣玉食。居高廈。鞭健馬。氣盛意揚。如百年不足復處者。一旦及不幸而失位。則其不顛顛失措。鬻馬典宅。而爲妻妾之泣。

者。幾希矣。乃不轉爲苟且取容之人。則變爲行險僥倖之徒。此與出於晴天朗日。而入風雨晦冥。亦何異。吾視子之名舍。以知其志之所在也。余曰。吁。客勿復言。方今治化休明。四方無虞。是以雖陋劣若余輩者。亦得悠優於山水之間。飲酒焉。賦詩焉。而恣賞玩晨靄夕霞焉。是誰之力乎哉。不然則坡公之堂。奚取於雪而名焉。蓋亦出於偶然爾。客冷然笑。乃書以爲記。

形見の記

含紫樓主人

たのれさりぬる年の葉月の中比郷の老母を省みして來たりし時よ、恰も日清戰爭の起りし初まりしかは、世の中、何となくさわかしく、殊に熊本は、第六師團の在る所、かれは、豫備後備の徵集に應じて來り集ひける兵士ども、皆々市中に宿とりて、何處の家にも充々たり、おのが宿れる家にも、初は三人はかり宿りける由ありしが、余の着きし比は、十四人居たりけり、いづれも田舎の農兵よしして、手紙などは、悉くたのれに頼みける程の者なり、まかは、日々練兵の後、首を一室に聚めて、いたづらよ日をくらし、何事にうあらむ、薩摩肥前の方言もて、いひさわき、誰一人さくとまもなく、酒をのみて狂ふもあれは、たはれ言いひあひて、夜をふかすもあり、そのさま、こるもく、るしく覺えし、さても、この者共の家を出つる、今日明日とさだするまゝに、家をも妻をも、打忘れて、只大君の御爲に、と勇みに勇みてや出でつらむも、熊本につきて、さて出陣の時、いつともえ定らざりまかは、皆々いつとなく、氣ゆるびて、酒の酔のさむる頃、夜の寢覺のさびしき時をよは、とやうくと、家の事を思出て、口はしるあり、家